

前から取り除かれていて、そこでは、内なるものが内なるものを見るということがなされている。見るということをおこなっているのは、区別されざるものとしてある同名のものである。その同名のものが【100】、自分自身を自分の外へ突き放しながら、区別されたものとしてある内なるものを立てるのだが、その内なるものにとって、直ちに、区別された二つが区別されざるものとして存在してもいるのである。そのような、区別されざるものとしてある同名のものが、自己意識なのである。明らかかなことだが、我々が内なるものを覆っていることとされるカーテンなるものの背後にまわらなければ、何も見ることはできないし、同様に、何かが見られるのは、見られることができる何かがカーテンの背後に存在することによってである。しかし、やはり明らかであるのは、しかるべき手順をふむことがなければカーテンの後にまわることはできないということである。というのも、現象とその内なるものについて表象されていることがほんとうは何であるかの知は、しかるべき手順をふんだ運動の結果でしかないものだからである。つまり、そうした運動によって、思い込むということとか、知覚することとか、悟性といった意識のもろもろのありかたが消失することの結果でしかないものだからである。が、やはり明らかであるのは、意識が自分自身を知るとき意識が何を知ることになるかを認識するためには、更なるしかるべき手順をふむ必要があるということである。その手順をひとつひとつ確かめてゆくことが、これから我々がおこなうことなのである。

れだから、説明することに大きな自己満足がともなうのは、言ってみれば、自分自身と直に対話し、自分自身を享受するというだけをおこなっているからなのである。確かに、そのさい悟性は、それとは別のことを営んでいるかのように見えるのだが、実際に悟性がおこなっているのは、自分自身のことにかかわらずということだけなのである。

最初の法則が転倒し、最初の法則とは対立する法則となる、ということが、区別が内なる区別となるということであるが、そのとき確かに、無限であることそのものが、悟性の対象となっている。しかし、悟性は再び、無限であることそのものをつかまえそこねるのである。【98】

それは、区別そのものの、同名のものが自分自身を自分の外へ突き放すこと、等しからざるものどうしが引きつけあうことを、悟性が再び二つの世界へと、つまり、二つの実体的な元素へと割り当てるからである。悟性が経験した運動は、悟性にとつてはひとつのできごとでしかないのである、同名のものと等しからざるものといったことは、述語でしかないのであり、述語が本質としているのは、存在している基体なのである。悟性にとつて対象は感覚的な被いをかぶって存在しているが、その対象が我々にとつては本質的な形態のうちに存在している。つまり、純粹な概念として存在している。区別されたものがほんとうはどのようなものであるかを把握し、無限であることを無限であることとして把握するということは、我々にとつてなされていることではなく、つまり、つまり、それそのものとしてなされていることではない。無限であることがどういふことかの概念を説明することは学に属することなのである。しかし、無限であることの概念を学を介することなくもつ意識は、再び、意識の独自の形式として、つまり、意識の新しい形態として登場するのである。この、意識の新しい形態は、先行するもののうちには、自分の本質を認識することなく、それを自分の本質とは別のものと見なすのである。―が、意識の対象としてあるのは無限であること概念なのだから、意識は区別されたものを、区別されたもののまま直ちに廃棄されたものでもあるようなものとして意識するのである。意識が向かい合っている自分自身なのである。意識は、区別されざるものを区別しているのである。つまり意識は自己意識なのである。私は自分を自分自身から

区別するのだが、そのさい、区別されたものが区別されたものではないことが私に直ちに意識されるのである。同名のものである私が私を私自身の外へと突き放すのである。しかし、そのようにして私が私から区別したものの、私と等しからざるものとして立てられたものは、それが区別されたそのときに、直ちに、私にとつては区別されざるものとなっているのである。さらに言えば、他であるものを意識し対象を意識することは【99】、必然的に、自己を意識することなのであり、自分へと折れ曲がり自分のうちへ還ることなのであり、他なるものでありながらその他なるものうちに自分自身を意識することなのである。意識のもろもろのこれまでの形態にとつてほんとうのものであったのは、ひとつの物だったし、自分とは異なる他なるものだったが、それらの形態の必然的な歩みが表現しているのは、物について意識するということは、自己意識にとつてのみ可能なことであるということではなく、自己意識こそが意識のほんとうのすがたにほかならない、ということである。しかし、自己意識こそが意識のほんとうのすがたにほかならないということが存在するのは我々にとつてだけであり、意識にとつては存在していない。自己意識は、ようやく、自己意識だけで存在するものとして生成したばかりであり、まだ、意識と統一したものとしては生成していないのである。

我々に見えているのは、現象の内なるものにおいて悟性が経験しているのは、ほんとうは、現象そのものにほかならないものである、ということである。そのさい現象とは、二つの力の戯れとしてあった現象ではなくて、絶対的に普遍的なまろの契機における戯れがくりひろげる運動における戯れとしてある現象である。それだから、現象の内なるものにおいて悟性が実際に経験しているのは悟性自身なのである。知覚を超えて高まった意識は、現象を媒辞としながら超感覚的なものと推理的につながるものとしてあらわれており、現象という媒辞をおとして意識はその背後にあるもの目にしてしているのである。推理的につながる二つの極の一方は、純粹な内なるものという極であり、他方の極は、その純粹な内なるものにまなざしを向けている内なるものである。が、その二つの極が重なり合い、極としてあった二つも、極とは別のものであった媒辞も、消失しているのである。媒辞というカーテンが内なるものの

の一方のものになっているのである。それだから、自分自身と等しくあるものは自分を分裂させるものとしてある、ということが意味するのは、自分自身と等しくあるものは分裂したものである自分を廃棄するものとしてある、ということなのであり、自分が自分にとって他なるものとして存在するということ廃棄するものとしてある、ということなのである。統一についてよく言われることとして、統一からは区別が出てくることができない、ということがあるが、統一は実際には、分裂のひとつの契機でしかないものである。統一とは、【96】区別されたものであることに対立することとしてある単純なものであることを抽象したものなのである。しかし、統一がそうした抽象されたものであり、対立し合うもののうちの一方でしかない、ということは、統一とは分裂させることだ、ということである。というのも、統一が統一ならざるものを否定するもの、統一ならざるものに対立するものとすれば、統一とは統一と統一ならざるものとの対立をそなえたものとして立てられたものであることになるからである。それだから、分裂すること、自分自身と等しいものとなることとが区別されるとき、そこにあるのは、自分を廃棄するという運動なのである。というのも、自分自身と等しくあるものが、まだ分裂してはおらず、ようやくこれから分裂するはずのものである、つまり、自分とは反対のものとなるはずのものであるとすれば、自分自身と等しくあるものは、ひとつの抽象でしかなく、それ自身がすでに分裂ものである、それだから、自分に等しいものとしてあるものが分裂すること、自分自身と等しいものとしてあるものがそれであるところのものを廃棄することであり、それゆえ、すでに分裂したものである自分自身を廃棄することであるからである。同じように、自分自身と等しくなるということは、分裂させるということなのである。自分自身と等しくなるものとしてあるものは、そのことによって、分裂することへと対立するものとなるのである。つまり、自分自身を対立の一方の側に置くのであり、対立し合うもののひとつとなるのである。

無限であるということは、自分で自分自身を運動させるということを経験することをおこなうことがおびる絶対的な不安定さのことなのである。つま

り、あるしかたで、例えば、存在するものとして規定されたものが、そうした規定をもつものとは反対のものであるという、絶対的な不安定さである。無限であることは、ここでこれまで見てきたことのすべてを満たす霊として、すでに存在していたものだった。しかし、無限であることそのものが、自由にあらわれ出たのは、内なるものにおいてが初めてである。二つの力の戯れという現象がすでに、無限であることを自由にあらわすものとしてあった。しかし、無限であることが初めて自由にあらわれたのは、説明することが初めてなのである。無限であるとはどのようなことなのかについて意識の対象となったのであり、意識はそのことによって意識は自己意識となるのである。悟性が説明ということをおこなったとき、最初になされたのはまだ、【97】自己意識とはどのようなものであるかを描写することではなかった。法則のうちに存在し、純粹なものとはなっているが、まだお互いに没交渉なものとして存在しているものもろの区別されたものを廃棄し、それらをひとつの統一のうちに置くということ、つまり力のうちに置くということが、悟性のおこなったことなのである。もろもろの区別されたものは、そのようにして互いと等しいものとなったのだが、等しいものとなるということは、直ちに、分裂することなのである。というのも、悟性は新たに法則と力とを区別することをおこなったが、その区別は同時に、区別ならざる区別なのであり、そのことによって悟性は、もろもろ区別されたものを廃棄し、力というひとつのものを立てることになっているからである。法則と力とのあいだの区別が、区別であると同時に区別ならざるものであるということに悟性がみずから気づくことができたのは、悟性が、力に法則と同じ性質をもたせることによって、法則と力とのあいだの区別を再び廃棄したからなのである。しかし、そのような運動、つまり、必然的になされないわけにゆかにこととしてのそれは、悟性が必然性におこなわれないわけにゆかないこととしてあり、そのようにして悟性がおこなう運動でしかないものである。つまり、運動そのものが悟性の対象となることはないのである。この運動において悟性が対象とするのは、陽電気や陰電気、距離、速度、引力、その他の何千もの物であり、それらが、運動をかたちづくもろもろの契機の内容をなすのである。そ

てあらわれる時間と【94】空間、あるいは距離と重さが、互いにたいしても、重力そのものにはたいしても没交渉で必然性をもたないものとなり、単純なものとしての重力のほうも、時間や空間、距離や重さにたいして没交渉なものとなるのである。あるいは、単純なものとしての電気が陽電気や陰電気にたいして没交渉なものとなるのである。しかし、内なる区別という概念によって、空間や時間といった、互いにたいして等しからざるものとしてあり、互いにたいして没交渉なものとしてあるものが、区別されたものでありながら区別されたものでないものとなる。つまり、同名のものが区別されているのではないものとなるのであり、区別されたものの本質は、統一したものであることとなるのである。区別されたものとしてあるものもろの部分は、一方が肯定的なものであり他方が否定的なものであるということをやめて、どちらも互いにたいして肯定的でありながら否定的でもあるものへと高められている。それらが存在するということは、それらが自分を存在しないものとして立てるということなのであり、それらが自分を廃棄して統一のうちにあるものとなるということなのである。二つのものが区別されるとき、それらのどちらも区別されたもののまま存在する。区別されたもののどちらも、そのものとして存在する。しかし、それらがそのものとして存在するのは、対立するものとしてなのである。つまり互いと対立するものとしてなのである。それらは互いに他であるものであり、他であるものをそなえたものとして存在しているのであり、他であるものとの統一ではないものなのである。

このようにして有限なものとして存在する無限なものが、絶対的な概念であるわけなのだが、それは生命の単純な本質、世界のすみずみを満たす霊、世界をあまねく流れる普遍的な血液と呼ばれるべきものである。その血液の流れはあらゆるところにゆき渡り、いかなる区別によっても濁らされることもないし、遮られることもない。それは、全ての区別されたものでありながら、同時に、それらの区別されたものが廃棄されているということでもあるのである。それゆえそれは、自分のうちで脈打ちながらも、それによって動揺することはないし、自分のうちで振動しながらも、それによって不安定になることはない。そうした無限なもの

は、自分自身と等しいものとして存在する。というのも、もろもろの区別されたものは同語反復だからである。それは、区別されたものでない区別されたもののなのである。それだから、自分自身と等しいものとしてあるそうした本質が結びつきをもつのは、自分自身とだけである。が、自分自身と結びつく、と言うときの自分自身とは、結びつくということが向かう他なるものなのである。【95】自分自身と結びつくということとは、結びつくということをおこなっている自分と、結びつくということが向かう他なるものとしての自分という、二つの自分に分裂するということなのである。自分自身と等しいものとしてあるということは、内なる区別をかかえるということなのである。そのようにして二つに分裂したものは、それそのものとして自分のちからで存在するものとして存在する。が、分裂した二つのもののうちのどちらも、他であるものとは反対のもの、他であるものに対立するものとして存在している。分裂したものの一方のことがかたられたとき、すでに同時に、他方の他であるものが語られている。あるいは、分裂したもののどちらも、他であるとは反対のもの、他であるものに対立するものではなく、純粹に反対のもの、純粹に対立するものでしかないものである。それだからそれは、自分自身でありながら、自分とは反対のもの、自分に対立するものなのである。あるいはそれは、反対のもの、対立するものでさえないのであり、自分のちからで純粹なものとして存在しているのであり、いかなる区別ももつことなく自分自身と等しいものとしてある純粹な本質なのである。それなので我々は、どのようにすればそうした純粹な本質から、しかもそうした本質の外に、区別があらわれ、区別されたものどうした互いに他なるものであるということが生じるのか、といったことを問う必要はないし、そうした問で苦しむことを哲学と見なす必要もないし、そうした問を哲学にとつて答えがないものと見なす必要もないのである。というのも、そうした問を口にしたとき、すでに、分裂が生じているからである。つまり、区別ということが、自分自身と等しくあるものの外に閉め出され、自分自身と等しくあるものとは別の側に置かれているのであり、それゆえ、自分自身と等しいものであるはずのものは、すでに、絶対的な本質であるというよりも、二つに分裂したもののうち

においてである。【92】つまり、犯罪を企てている意図そのものにおいては、犯罪は、犯罪ならざるものへと転倒したものであることができるのである。しかしそれでも、犯罪を企てる意図は善き意図ではない。というのも、意図のほんとうのすがたは、その意図がもたらした行為そのものでしかないからである。しかし、犯罪は、なされた犯罪の内容にもとづき、その犯罪に科された現実の刑罰において、自分へと折れ曲がり自分のうちに還るのであり、犯罪のそのものとなるのである。刑罰は、法則が、法則に対立するものとして犯罪のうちに存在する現実と和解する場合なのである。現実の刑罰は最後に、自分の転倒した現実を以下のようにして自分にもたらず。つまり、刑罰は法則が現実化したものであるわけだが、現実化がすすむにしたがって、法則による刑罰としてなされた行為が自分自身を廃棄し、法則は刑罰という行為をおこなうものであることをやめて、強制力をもちながらも安らかに静止したものとなるのであり、個人が法則に対立する運動をおこなうことも、法則が個人に対立する活動をおこなうこともなくなるのである。

転倒は超感覚的な世界の一方の側面をかたちづくるものとしてある転倒がどんなものを表象するとき、おこなってはならないのは、もろもろの区別されたものを、それらの存在をゆるがないものとするさまざまな元素のうちで固定しながら、感覚的なものとして表象することである。区別の絶対的な概念とは、区別が内なるものとしてあるということであり、同名のものが同名のもののまま自分自身を自分の外へと突き放すということであり、等しからざるものが等しからざるもののまま等しいものとして存在するということであるが、区別のそうした絶対的な概念が純粹に表現され、把握されなければならないのである。純粹な交替、すなわち、自分自身における対立、矛盾といったことは、思惟されなければならないことなのである。というのも、内なる区別として存在する区別においては、対立するものは、二つのもののうちのひとつなのでなく——もしもそうだとしたならば、それはひとつの存在するものであつて、対立するものではないことになる——対立するものに対立するものなのである。【93】つまり、対立するものが存在するとき、直ちにそこに、それに対立する他なるものが存在するのである。確かに私は、対立する

ものをここに置き、それに対立するものである他者をあちらに置く。それだから、私が一方の側に置いた対立するものは、他なるものなしに、それそのものとして自分のちからで存在している。けれども、私がもつ対立するものが、それそのものとして自分のちからで存在するものであるのは、対立するものが、自分自身に対立するものだからなのである。対立するものは、実際には、自分に対立する他なるものを直に自分の身につけているものとして存在しているのである。——それと同じようにして、転倒したものである超感覚的な世界は、同時に他の世界を包み込んだものとしてあるのであり、他の世界そのものをもつものなのである。それは自分のちからで、転倒した世界として存在している、つまり、転倒した自分自身として存在している。その世界は、その世界そのものであるということと、自分に対立するものであるということが、統一されてひとつになつて存在する世界なのである。そのようにしてのみ、その世界は内なるものとして存在する区別となるのであり、つまり、区別そのものとして存在する区別となるのであり、つまり、無限なものとして存在するものとなるのである。

無限なものがあらわれたことによつて我々が目にするのは、法則が完全な必然性をそなえたものになつていくということであり、現象をかたちづくる全ての契機が内なるもののうちへ受け入れられているということである。法則がもつ単純なものとは、無限なものというありかたをするものなのである。そのことが意味すること、ここで生じていることをもとに述べておこう。a) 法則は、自分自身と等しいものでありながら、区別そのものでもあるものとして存在する。つまり、同名のものでありながら、自分を自分の外へと突き放す、つまり、自分を分裂させるものとして存在する。単純な力と呼ばれていたものは、自分自身を二重化するものとして存在する。単純な力は、それが無限なものであることによつて、法則となるのである。b) 分裂したものが、法則のうちにあるものとして表象されるもろもろの部分をかたちづくるものであるわけだが、その分裂したものが、分裂したまま存在を続けるものとしてあらわれる。そしてそれらの部分が、内なる区別という概念を欠いたまま考察されるとき、以下のようなことになる。重力をかたちづくる契機とし

ではN極として存在するのである。電気の最初の法則においては酸素極であるものが、それとは別の超感覚的な存在においては水素極として存在し、反対に、前者では水素極であるものが後者では酸素極として存在するのである。話を別の領域に移すならば、転倒を介さないそのままの法則においては、敵への復讐が、傷つけられた個人を最高度に満足させるものとして存在する。その法則によれば、私がおこなうのは、私を私そのものとして扱わない人間にたいして、私とその人間を許すことのない存在であることをその人間に示しながら、その人間の存在を廃棄するというものである。が、その法則が、別の世界の原理によって転倒し、それとは反対のものとなるのである。つまり、よそよそしい他者の存在を廃棄することによって私の存在を回復するということが転倒し、【90】自己破壊となり、他者を廃棄するということが他者を廃棄することによってなくなるのである。そのような転倒は、犯罪への刑罰において見られるものであるわけだが、そうした転倒が法則とされるとき、転倒は再び、ひとつの世界の法則でしかないものとなり、その世界は自分に対立する、転倒した超感覚的な世界をもつことになる。そしてその転倒した世界においては、もとの世界においては侮辱であるものが名誉となり、もとの世界においては名誉であるものが侮辱となるのである。最初の世界の法則によれば、人間を辱め滅ぼす刑罰であるものが、転倒した世界においては、人間の存在を保ち人間を名誉あるものとする恩寵となるのである。

表面的な見かたをするならば、そうした転倒した世界が最初の世界とは反対のものであるのは、以下のようにしてなのである。つまり、転倒した世界が最初の世界を自分の外にもち、最初の世界を転倒した現実とみなして自分の外へ突き放すというようにしてであり、一方の世界は現象であるが他方の世界はそのものであり、一方の世界は他のものにたいして存在する世界であるのにたいして、他方の世界は自分のちからで存在する世界である、というようにしてである。さきの実例をもちだすならば、甘い味がするものは、物の本来的で内的なありかたにおいては酸っぱいものなのであり、あるいは、現象している現実的な磁石においてN極であるものは、磁石の内的で本質的なありかたにおいてはS極なの

だとされるのである。現象する電気において酸素極としてあらわれるものは、現象していない電気においては水素極なのだとされるのである。あるいは、現象においては犯罪である行為は、内的なものにおいては、本来的に善であることができる（悪しき行為も善い意図をもつことができる）とされるのである。刑罰が刑罰であるのは現象におけることではないのであり、そのものとしては、つまり【91】別の世界においては、犯罪者にたいする慰めなのである。けれども、そこにあるのは、内的なものとの外的なもの、現象と超感覚的なものという対立するものが、二つの現実として存在している、ということなのではない。同名のものが自分を自分の外へ突き放すことによってあらわれたもろの区別されたものが、二つの実体に割り当てられ、その二つの実体がそれらを担い、それらに別々の存在を付与するというようなことが、ここで新たに起こなわれることはないのである。悟性がそうしたことをおこなったならば、悟性は内的なものから離れて、再び悟性の以前の立場へと逆戻りすることになるだろう。悟性がそうしたことをおこなうとき、一方の側面ないし一方の実体が再び知覚の世界となり、二つの法則のうちの一方が知覚のその世界をしきることになる。知覚のその世界に対立する他方の側面、他方の実体として内なる世界がある。この内なる世界も、知覚の世界と全く同じ感覚的な世界なのだが、ただし、そうであるのは表象においてなのである。それは感覚的な世界のように指さしたり、見たり、聞いたり、味わったりすることができないにもかかわらず、見たり聞いたり味わったりできるような感覚的な世界として表象されているのである。しかし、実際には、一方の法則は知覚されたものであり、その知覚されたものの転倒としてあるそのものも、同じように、感覚的に表彰されたものなのである。甘い物のそのものとされる酸っぱいものは、甘い物と同じように現実的な物なのである。白のそのものとされる黒は、現実的な黒なのである。S極のそのものであるN極は、同じ磁石に存在しているN極なのである。水素極のそのものである酸素極は、同じ電気パレルに存在している酸素極なのである。しかし、現実の犯罪の場合、犯罪が犯罪の転倒したものとなることができるのは、つまり、犯罪のそのものとなることができるのは、犯罪を企てている意図そのもののうちに

つまり、変わることなく自分と等しいものそのままであり続ける区別とは、反対のことである。というのも、この新しい法則は、等しいものは等しからざるものとなるものであり、等しからざるものは等しいものとなるものである、ということ表明するものであるからである。観念を欠いたものたちにむかって概念が要求するのは、二つの法則をつき合わせながら、二つの法則が対立するものであることを意識することである。――確かに、第二の法則も法則ではあり、自分自身と等しいものとしてある内なるものである。けれども、自分自身と等しいということは、等しからざるものであるというありかたをつねに等しくおこなっているということなのであり、変わらないものであるということとは、変わりゆくものであるということが変わることがないということなのである。――二つの力の戯れにおいても、そこにある法則は、二つの力の一方が他方へと絶対的に移行するということであり、一方が他方に純粹に交替するということであることが示された。力という同名のものが【88】自分を分解させて、互いと対立するものになり、その、互いと対立するものは、互いから自立し互いから区別されたものであるかのように見えるのだが、しかしそれは実際にはそうしたものではないことが示されたのだった。というのも、自分を自分自身の外へ突き放すということがなされるさい、どちらの自分も同じ名前をもつものとしてあり、それだから、突き放されたものは、互いと同じものとしてあり、本質的に引きつけ合うものとして存在するからである。区別がなされても、区別されたものは区別されたものではないから、自分自身を廃棄するのである。そのようにして区別は、ことがらそのものの区別であることが、つまり、絶対的な区別であることが示される。それだから、ことがらがそうした区別をもつものとしてあるということは、同名のものが自分を自分の外へ突き放すということがなされているということにほかならないのであり、したがって、立てられた対立は、対立でない対立でしかないのである。

この原理によって、最初の超感覚的なもの、もろもろの法則の静止した国、知覚された世界をそのまま写した模倣は、その反対のものへと転倒することになる。もともと法則は、法則におけるもろもろの区別がそうであるように、自分と等しいものであり続けるものだった。しかし、

いま立てられているのは、法則もそれがもつ区別も自分自身の反対のものである、ということなのである。つまり、自分と等しいものは自分を自分の外へ突き放すものとしてあり、自分と等しくないものは自分を自分と等しいものとして立てるものとしてあるのである。実際には区別はそうした規定、つまり、等しいものは自分と等しくないものであり、等しくないものは自分と等しいものであるという規定をもつものとしてあるのであり、そうした規定をもつことで、区別は内的な区別となるのである、つまり、そのものとして存在する区別となるのである。――そのようなかわけで、この第二の超感覚的な世界は、転倒した世界として存在する。しかも、自分と等しいものであり続けるという側面は、すでに最初の超感覚的な世界に存在しているものであるから、この第二の超感覚的世界は最初の超感覚的な世界が転倒したものである。そのことによつて、内なるものは現象としてあらわれながら、完成したものとなるのである。というのとは、最初の超感覚的な世界は、知覚された世界をそのまま普遍的な元素へと高めたもの【89】でしかなかったからである。

つまり、最初の超感覚的な世界は、その必然的な模倣を知覚された世界においてもつものとしてあり、交替と変転の原理は、知覚された世界のものでしかなかったのである。もろもろの法則の最初の国は、交替と変転の原理を欠くものだったが、その国が転倒し、転倒した世界となると、その国は交替と変転の原理を手にするのである。

それだから、その転倒した世界の法則にしたがうならば、最初の世界においては同名のものとしてあったものは、自分自身とは等しくないものとして存在し、同様に、最初の世界において等しくないものとしてあったものは、自分自身にとつて等しくないものとして存在することになる、つまり、自分と等しいものとして存在することになる。そのことが、もろもろの規定された契機においてどのようなこととして結果するかと言えば、最初の世界においては甘いものが、転倒したそのものにおいては苦いものとしてあり、前者においては黒いものが、後者においては白いものとして存在する、ということになるのである。前者の世界にある磁石においてはN極であるものが、磁石とは別の超感覚的なそのもの（つまり地球）においてはS極として存在し、前者でS極であるものが後者

れるのだが、その法則が力へとひとまとめにされ、力が法則の本質であると説明されるのである。が、その力なるものがどのような性質をもつものなのかと言えば、力は自分を外化するものとしてあり、そのとき陽電気と陰電気という対立する二つの電気があらわれ、あらわれたそれらの二つの電気が再び互いのうちで消失するのである。つまり、力は法則と同じ性質のものである。語られているのは、力と法則とのあいだには何の区別もない、ということなのである。区別されているのは、純粹に力の普遍的な外化であるもの、つまり法則と、純粹に力であるものである。けれども、その二つは同じ内容を持ち、同じ性質をもつものなのである。それだから、内容が区別されても、つまり、ことがらに区別がもちこまれても、そうした区別はやはり再び撤回されるのである。

以上のような同語反復的な運動において明らかであるのは、悟性の対象は静止した統一したものであるという悟性の主張がゆらぐことはなく、運動は【86】悟性そのものの中に属するものとしてあり、対象には属さないものだ、ということである。そうした同語反復的な運動をおこなうことが、説明することなのである。そこでは何も説明されていないだけではない。明らかであるのは、悟性は、自分が既に語ったこととは異なる何かを語ろうとしているかのようにでありながら、そうしたことは何も語っておらず、同じことばかりを繰り返している、ということである。そうした同語反復的な運動によつては、ことがらそのものには新しいことは何も生まれず、同語反復的な運動が考慮にのぼるのは、悟性がおこなう運動としてなのである。けれども我々がその同語反復的な運動のうちに認識するのは、法則における悟性が見失っていたものである。つまり、絶対的な交替そのものである。というのも、同語反復的な運動を我々がさらに詳しく考察するならば、この運動は、直ちに自分自身の反対のものとなるということだからである。つまり、この運動はひとつの区別を立てるのだけれども、その区別は我々にとつて区別ならざるものであるだけではなく、その区別が区別としてあることが運動そのものによつて廃棄されるのである。それは、二つの力の戯れにおいてすがたをあらわしたのと同じ交替である。二つの力の戯れにおいて存在していたのは、誘発するものと誘発されるものとの区別であり、

自分を外化する力と自分のうちへと押し戻された力との区別だった。けれども、それらの区別は、ほんとうは区別ならざるものであるような区別であり、それゆえ、区別としてある自分を直ちに再び廃棄するような区別なのだった。ここに存在しているのも、いかなる区別も立てられていないような、たんなる統一だけではない。ここにあるのは、区別がなされはするのだが、その区別が区別ならざるものであるがゆえに、再び廃棄される、という運動なのである。―それなので、説明がなされるとき、それにともない、以前は内なるものの外にあるものであり、現象にのみ属するものであった変転と交替が、超感覚的なものそのものへと入り込む、ということが生じているのである。けれども、我々が今ここで観察してきた意識がおこなっているのは、対象としてある内なるものから外にでて、【87】内なるものの反対側にある悟性へとまなざしを向ける、ということなのである。意識にとつて交替は、対象としての内なるもののうちにあるものではなく、悟性にうちあるものなのである。

交替がそうしたものであるので、そこではまだ、ことがらそのものが交替することはない。交替は、ことがらそのものとはかわりがないところで純粹におこなわれる交替としてあらわれる。が、そうであるのは、交替しながらあらわれるもろもろの契機がもつ内容が同じものにとどまることによつてなのである。陰電気はいつまでも陰電気のままであり、陽電気はいつまでも陽電気のままなのである。それらの交替は悟性に属するものでしかなく、悟性の概念でしかないのである。しかし、概念は悟性の概念でありながらも、もろもろの物の内なるものであるものと同一のものであるから、交替は悟性にとつて、内なるものの法則として存在するものなのである。それなので悟性は、以下のことを現象そのものの法則として経験することになる。つまり、生じる区別は区別ならざるものだということを、であり、同じ名前をもつものが自分を自分自身の外へと突き放すのだということを、である。同様に、もろもろの区別はほんとうは区別ならざるものなのであり、自分を廃棄するものとして存在するということを、であり、異なる名前をもつものが互いを引きつけるものとして存在するということを、である。―これが第二の法則となる。それが内容としているのは、さきに法則と呼ばれたもの、

知るためには、それを法則と照合させてみるだけでいい。明らかにしたのは、法則の必然性なるものは、いま見たようななどの形式におけるものでも、無意味な空っぽの言葉でしかないということである。

法則と力とが、つまり概念と存在とが互いと無関心なものとしてあるありかたには、さきにしたのとは別のものも存在する。例えば、運動の法則の場合、運動が時間と空間とに分かれ、あるいはそのうえでさらに距離と速度ともに分かれることは、必然的なことである。運動はそれらの契機どうしの関係であるので、普遍的なものである運動は、ここで確かに、そのものとして分かれたものとなっている。けれども、それらの部分が、つまり、時間と空間、距離と速度が、ひとつのものを出所とするものであることを示すものは、それらのうちにはないのである。それらの部分は、互いに対して無関心なものとして存在している。空間は時間なしに存在できるものとして表象されており、時間は空間なしに存在できるものとして表象されており、距離は速度なしに存在できるものとして表象されているのである。——同様に、それらの量も互いに対して無関心なものとして存在している。それらのあいだの関係は、肯定的なものと否定的なものとの関係ではないからである。そしてそのため、それらは、みずからの本質によって互いと結びつくということはない。それだから、そうした部分に分かれる必然性は、確かに存在してはいるのだが、それぞれの部分が互いに対してしかじかのものとして存在しなければならぬ必然性はないのである。けれども、そうであるがゆえに、ここにある、部分に分かれる必然性は、見せかけの偽りの必然性【84】ではないのである。すなわち、運動が単純なものとして、つまり純粋な本質として表象されていないのであり、既に部分に分かれたものとして表象されているのである。時間と空間のそれぞれが、運動の互いから自立した部分ないし本質なのである。あるいは、距離と速度は、運動が存在する二つのしかた、運動を表象する二つのしかたであり、二つのしかたの一方は他方なしに存在可能なものである。それだから運動は、それらの部分どうしの表面的な結びつきでしかないものであり、それらの部分の本質ではないのである。運動が単純な本質として、つまり力として表象されるならば、確かに運動は重力ではあるのだけれども、重力は距離

と速度の区別を含むことがないものとして存在するのである。

それだから、どちらの場合においても、区別は、区別そのものではないのである。力という普遍的なものが、法則にしたがい部分に分かれるということに対して無関心なものとして存在するか、あるいは、法則をかたちづくるもろもろの区別されたものとしてあるもろもろの部分が、互いに対して無関心なものとして存在するかのいずれかなのである。けれども悟性は、区別そのものの概念をもっている。というのは、法則は内なるもの、そのものとして存在するものでありながら、それと同時に、その内なるもののうちにおいては、もろもろの区別されたものでもあるからである。区別が悟性の内なる区別としてあるということは、法則が単純な力であり、つまり法則の概念として存在するものであり、それゆえ、概念のもつひとつの区別である、ということに含まれていることなのである。けれども、そのような内面的な区別はまだようやく悟性に属するものとして存在するだけであり、ことがらそのものにおいて立てられたものにはなっていない。それなので、悟性が表明する必然性とは、悟性のもつ必然性ではないのである。それだから、区別は悟性がおこなう区別ではないのであり、悟性は区別をおこなうと同時に、その区別がことがらそのものの区別ではないことを表明するのである。そうした区別は【85】言葉のうえでのものでしかないものであり、そのため区別は、必然性の循環をかたちづくるもろもろの契機を数え上げるといふかたちでおこなわれる。それらの契機は確かに互いと区別されたものとして存在するのだが、それと同時に、それらの契機どうしの区別がことがらそのものの区別ではないことが表明されるのであり、それなので、区別はただちに再び、廃棄されたものとなるのである。そうした運動が説明と呼ばれるものなのである。ひとつの法則が語られ、その法則から、その法則におけるそのものとして普遍的なものが、つまり、その法則をなりたたせている根拠が区別され、それが力と見なされる。しかし、その区別について語られることは、その区別は区別ならざるものであり、法則をなりたたせている根拠は、法則と全く同じ性質のものである、ということなのである。例えば、稲妻という個別的なできごとが普遍的なものとして把握され、その普遍的なものが、電気の法則であると表明さ

である、ということである。法則の内なる必然性によってそうならないわけにゆかないのである。

そのことによって、法則は二重のありかたをするものとなる。つまり、一方で法則は、区別されたもろもろのものを自立した契機として表現するものでありながら、他方では、自分のうちに還った単純なものとして存在するという形式のうちにあるものでもあるのである。後者は再び力と呼ばれることがあるが、その力とは、自分のうちに押し戻された力のことでなく、力一般のことであり、つまり、力の概念のことである。それはひとつの抽象であり、その抽象が、引くもの、あるいは、引かれるものとして区別されたものを、自分のうちに引き入れているのである。例えば、単純な電気は力である。力にどのような区別があるかを表現することは、法則に属することであり、力は陽電気と陰電気とに区別される。物体の落下運動の場合ならば、力は、重力という単純なものである。経過した時間と通過した空間とが運動のもつ異なる契機としてあり、それらの契機のそれぞれの量が根と二乗との関係にあるということが、重力のもつ法則となるのである。電気自身は区別そのものではなく、陽電気と陰電気という二重のありかたを本質とするものではない。【82】それだから、ふつう、電気はしかじかのしかたで存在するという法則をもつものとして存在する、とか、しかじかに自分を外化するという性質をもつものとして存在する、という言いかたがなされるのである。それらの性質は確かに、電気という力のもつ本質的ただひとつの性質ではある。つまり、それらの性質は電気という力にとって必然的なものとして存在する。けれども、その、必然という言葉は、何も語ってない空っぽの言葉なのである。その言葉で語られるのは、力が自分を二重化しないわけにゆかないのは、力が自分を二重化しないわけにゆかないものだからだ、ということなのである。確かに、陽電気が立てられているならば、陰電気もそのものとして必然的に存在する。というのも、陽電気が存在するのは、陰電気と結びつきながらでしかないからであり、つまり、陽電気は、自分とは区別されたものと密着しているものとしてあるあるからであり、陰電気も同様だからである。しかし、電気そのものが陽電気と陰電気とに分かれるということは、そのものとしては、必然的なこと

ではないのである。単純な力としてある電気は、自分が陽電気および陰電気として存在するという法則に対して無関心なのである。我々が単純な力であることを電気概念と呼び、そうした法則を電気存在と呼ぶならば、電気概念は電気存在に対して無関心であることになる。電気は、しかじかの性質をもつだけなのである。そのことが意味するのは、まさに、陽電気および陰電気として存在するということが、電気にとつて、そのものとして必然的なことなのではない、ということなのである。――電気が陽電気および陰電気として存在することに無関心なものとして存在するということが別のかたちをとることがある。それは、電気が陽電気および陰電気として存在するということは、電気定義に属することなのである、と語られたり、陽電気および陰電気として存在するということは、端的に言つて電気概念であり電気の本質なのである、と語られるときである。その場合、電気が陽電気および陰電気として存在する、という言葉は、電気が陽電気および陰電気というすがたであらわれ得るものとしてある、という意味で語られている。けれども、電気定義のうちには、電気が、陽電気および陰電気というすがたであらわれ得る必然性をもつものであるのがなぜなのかは、語られていない。そこで、電気陽電気および陰電気というすがたであらわれ得るものとしてあるのは、電気がそのようなものとして見いだされるからであるか、あるいは、電気以外のもろもろの力によることであるのかの、いずれかであることになる。しかし、電気陽電気および陰電気というすがたであらわれ得るということが、ただ見いだされることでしかないのならば、それは必然的なことではないことになるし、電気以外のもろもろの力によるのなら、陽電気および陰電気というすがたであらわれ得る必然性が電気にとつて外的なものであることになる。が、【83】電気がそうした外的な必然性のもとにあるということが、さらに、電気が他のものにとつて規定されたものとして存在するということとなるとき、我々は再び、もろもろの規定された法則が数多く存在するという、我々が立ち去ったばかりの状況に逆戻りすることになる。我々がそこを立ち去ったのは、法則をその概念どおりの法則として考察するためだった。法則概念がどのような概念なのかを、つまり、法則の必然性がどのようなものかを

れども法則が法則一般ではなくて、ひとつの法則である限りで、法則は規定されたありかたをするものである。が、そのことによって、不特定多数の法則が存在することになるのである。けれども、多数の法則が存在するということは、それ自身、欠陥なのである。つまり、多数の法則が存在するということは、悟性が原理とすることと矛盾することなのである。悟性とは、単純な内なるものについての意識であるわけだが、その悟性にとってほんとうのものとしてあるのは、そのものとして普遍的なものとしてある統一なのである。それだから悟性は、多数の法則をひとつの法則へと合同させないわけにゆかないのである。例えば、地上において石が落下するさいの法則と、天空の運動をつかさどる法則とが、ひとつの法則として把握される、というようにである。しかし、もろもろの法則は、そのようにしてひとまとめにされるにつれて、その規定されたありかたを失うことになり、法則はどこまでも表面的なものとなってゆくのであり、そのときそこに実際に見いだされるのは、もろもろの規定された法則の統一ではなくて、規定されたありかたを取り除かれたもろもろの法則なのである。ちょうど、地上における物体落下の法則と、天空の運動の法則とを合一したひとつの法則が、実際には、その二つの法則を表現するものではないように、である。あらゆる法則を普遍的な引力（万有引力）において合一したものは、法則そのもののたんなる概念以上の内容をもつものではないのであり、法則のうちに存在するものとして立てられているのは、そうしたたんなる概念ではないのである。普遍的な引力（万有引力）とは、「あらゆるものが他のものに対して、変わることをない区別をもつものとして存在する」ということを語るものでしかないのである。そのさいに悟性は、普遍的な現実であるものそのものを表現しているような普遍的な法則を見いだしたと思いついては、悟性が実際に見いだしているのは、法則【80】そのものの概念でしかないものである。ただし、悟性はそのとき同時に、現実が存在するものは全てそれ自身において合法則的なものとしてある、ということを表示している。それだから、普遍的な引力（万有引力）という表現が、観念を欠いたまま表象をめぐらすことに向けられた批判である限りで、それは非常に重要なものとしてある。観念を欠いた

まま表象がめぐらされるとき、全てのものごとは、偶然におきたできごとという形態をまとうてあらわれることになり、規定をもったものとして存在するということが、他から自立したものであることが感覚によって確かめられたものにあてがわれる形式となるのである。

こうして、もろもろの規定された法則には、普遍的な引力（万有引力）が、つまり、法則の純粹な概念が対立することになるのである。法則のそうした純粹な概念が本質と見なされる、つまり、ほんとうの内なるものと見なされる限り、規定された法則が規定されたものとして存在するということは、現象に属するものであることになる。あるいは、現象に属するもの、と言うより、感覚される存在に属するもの、と言ったほうがいいかもしれない。しかし、法則の純粹な概念は、ひとつの規定された法則として他のもろもろの法則に対立するような法則であるものを超えたものであるだけでなく、法則が法則であることを超えたものであるものである。いま述べたような、法則の規定されたありかたは、本来は、消失する契機でしかないものであり、法則の本質的なありかたとしてあらわれることがもはやできないものである。というのも、ここでほんとうのものとして存在しているのは、法則の規定されたありかたではなく、法則だけだからである。けれども、法則の概念は法則そのものに向かうものでもあるのである。つまり、法則においては、法則の内容をかたちづくる区別が、そのままのすがたで把握され、そのままのすがたで、普遍的なもののうちに受け入れられているのであり、その結果、以下のことがおきるのである。それは、法則とはもろもろの契機がどのように結びつくかを表現するものであるのだが、それらの契機が互いに対して無関心で、それそのものとして存在するような本質となつて存在を続ける、ということである。けれども、法則において区別されるそれらの部分は、それと同時に、法則の規定された側面でもあるのである。普遍的な引力（万有引力）というような法則の純粹な概念をそのほんとうの意味において理解するためには、以下のことが理解されていなければならない。つまり、法則は絶対的に單純なものとしてあり、その法則においては、法則そのもののうちに存在するもろもろの区別されたもの【81】もまた、單純な統一である内なるものへと還るものとし

も、規定された内容として対立し合うという関係にある場合も、どちらの場合も、自分のちからで、絶対的に【77】転倒し交替するものとして存在する。が、さらに、その二つの関係が同一のものなのである。誘発するものと誘発されるものという形式のもつ区別は、内容のもつ区別であるものと同じものである。誘発されるものは、誘発を受けるものであるから、受動的な媒体なのである。それに対して、誘発するものは能動的なものであり、否定的な統一であり、つまりひとつであるものなのである。そのようにして、力がくりひろげる運動のうちに存在していたはずのもろもの特殊な力のあいだの区別は、全て消え去る。というのも、それらの特殊な力は、あくまでも、二つの力のあいだの区別に依拠して存在していたものだからである。が、二つの力のあいだの区別のほうも、内容上の区別や形式上の区別ともども、ひとつの区別へむかって崩れ落ちるほかないものである。そのようにして、力も存在しなくなり、誘発したり誘発されたりということも存在しなくなり、揺らぐことのない媒体であるとか、自分のうちへと折れ曲がり自分のうちへ還った統一であるとかの規定されたありかたも存在しなくなり、自分のちからで存在する個別的なものも存在しなくなり、それらのあいだのさまざまな対立も存在しなくなるのである。絶対的な入れ替わりのうちにあるのは、普遍的なものとしてある区別だけなのである。つまり、これまであった多数の対立はそうした区別のうちへと還元されてしまったのである。それだから、普遍的なものとしてあるその区別こそは、力の戯れそのものにおける単純なもの、力の戯れにおけるほんとうのものなのである。そうした区別が力の法則である。

絶対的に入れ替わるものとしてある現象が、単純な区別になるのは、単純なものとして存在している内なるものあるいは悟性に結びつくことによつてである。内なるものは、最初は、そのものとして普遍的であるものでしかなかった。しかし、この、そのものとして単純に普遍的なものとしてあるものは、本質的に、単純なものであるのと同じように、絶対的に、普遍的な区別としても存在するものである。というのも、内なるものは【78】入れ替わるものの結果そのものであり、入れ替わることが内なるものの本質であるのだが、入れ替わることがそのほん

うのすがたで内なるもののうちに立てられるとき、入れ替わることは、内なるものと同じように絶対的に普遍的で静止して自分自身と等しいものであるような、そうした区別として、内なるもののうちに受け入れられたものとなるのである。あるいは、否定は普遍的なものをかたちづくる本質的な契機なのであり、それだから、否定すなわち媒介は普遍的なもののうちで、普遍的な区別となって存在するのである。そうした普遍的な区別が法則として表現されるとき、法則が不安定な現象の安定した像として存在することになる。そのようにして、超感覚的な世界は、もろもろの法則が静かに安らぐ国となるのである。知覚された世界は、休むことなく変化するものとしてあり、知覚された世界が法則を表現するものとしてあるのは、そうした休みなく変化することによつてではないから、もろもろの法則の国は、そうした知覚された世界の彼岸にあるものとして存在する。しかしそれは、同じように、知覚された世界のうちに存在するものとしてもあるのであり、そのときそれは、知覚された世界をそのまま模した静かな模像となるのである。

もろもろの法則の国は、確かに悟性のほんとうのすがたとして存在するものであり、それは、法則のうちにある区別を内容とするものとして存在する。しかし、もろもろの法則の国は同時に、悟性の最初のほんとうのすがたでしかないものであり、現象のすみずみを満たすものではないのである。法則は現象のうちに存在するものであるのだが、現象の全てにゆき渡つたものではないのである。法則がおかれた状況が別のものに変わり続けるなかで、法則の現実のありかたも別のものに変わりつづけるのである。それなので、現象には、内なるものには存在しない側面が残りに残っているものであり、その側面が自分のちからでそうした側面として残り続けているのである。つまり、現象はほんとうはまだ、現象として立てられたものとなっていないのである。すなわち、現象が自分のちからで存在するものとしてあるということが、ほんとうはまだ廃棄されていないのである。法則のそうした欠陥は、法則自身においてもあらわれないわけにゆかないものとして存在する。法則の欠陥は、法則が区別をそなえたものとして存在するとしても、その区別が規定を欠いた普遍的なものではない、ということであるかのように見える。【79】け

きながら、我々がほんとうのものではないことを知っているものをほんとうのものとして受け取るということである。それは以下のようにしておこなわれる。つまり、空っぽのものは、最初は、対象となるような物が何もない空っぽさとして生じたわけだが、その空っぽのものは、空っぽさそのものとして受け取らなければならないものとしてあり、意識とものごととのまろろの精神的な関係も、意識が区別したまろろのものごととも、ことごとく空っぽであるということとしても受け取られなければならないものとしてもあるのであり―それだからそれは、聖なるものと呼ばれるような完全に空っぽのものなのであり、それを何ものかとして存在させるために、それを、まろろの夢想でもって満たす、つまり、意識自身が生み出したまろろの現象でもって満たすのである。ひどい扱いではあるが、空っぽのものはそれを気に入らないわけにゆかないだろう。というのも、空っぽのものはこれ以上の扱いには値しないものだからである。夢想で満たされることのほうが、空っぽのままにいるよりはまだましなのである。

しかし、超感覚的な彼岸としてある内なるものは、現象のなかから生まれ、現象のなかからあらわれたもののなのである。現象が内なるものとなりたせている媒介なのである。つまり、現象が内なるものの本質なのであり、実際に、現象が内なるものを満たす内容となっているのである。超感覚的なものは、感覚され知覚されるものがほんとうのすがたにおいて立てられたもののなのである。感覚され知覚されるものほんとうのすがたとは、現象であることなのである。それだから、超感覚的なものは、現象としてある現象なのである。―そのさいに、「それだから、超感覚的なものは、感覚される世界なのだ。つまり、感覚の否定を介さないまま感覚的な確信や知覚がなされたとき、そこに存在していた世界なのだ」と考えられたならば、その考えかたは転倒している。というのも現象は、感覚によって知られ知覚される世界であるとしても、存在するものとして立てられたそれではなく、廃棄されたものとして立てられたそれであるからである。そのようにして廃棄された世界が、つまり、内なるものなのである。「超感覚的なものは現象ではない」と言われるのが常だが、その場合、現象という言葉のもとで理解されている

のは現象ではないのであり、実在する現実的なものとして感覚されている世界なのである。

【76】我々の対象となっている悟性は、以下のような立場にいる。つまり、悟性にとって内なるものは、普遍的ではあるが、まだ満たされていない空っぽのそのものとして生成したばかりである。悟性にとって二つの力の戯れは、そのものとして存在するものではないという否定的な意味をもつものでしかない。それは、悟性と内なるものとを媒介するものという肯定的な意味をもつものなのだが、悟性と内なるものとを媒介するということは、悟性の外でなされることでしかないのである。二つの力の戯れを媒介としながら悟性が内なるものと結びつくということが、これから悟性のおこなう運動なのであり、その運動をおして内なるものが悟性にとって満たされたものとなるのである。―悟性にとってじかに存在しているのは、二つの力の戯れである。けれども、悟性にとってほんとうのものであるのは、単純な内なるものである。したがって、力がくりひろげる運動が悟性にとってほんとうのものであるのは、その運動が、内なるものがそうであるように、単純なものとしてあるときなのである。二つの力の戯れについて我々が見たのは、それが以下のような性質のものであるということだった。つまり、他の力によって誘発されるものとしてある力は、他の力に対して誘発するものとしても存在しているのであり、他の力が誘発するものであることができるのも、そのおかげなのである。二つの力の戯れが登場するさいのただひとつの内容をなすのは、普遍的な媒体であるか、否定的な統一であるかという規定であったが、二つの力の戯れのそうした規定されたありかたは、ただちに入れ替わり、じかも絶対的に入れ替わるものとして存在するのである。二つの力の戯れは、ひとつの規定されたものとして登場するのだが、ただちに、登場のさいにそれであったところのものであることをやめるのである。二つの力の戯れは、規定されたものとして登場することによって、他の側面を誘発し、他の側面はそうに誘発されることによって、自分を外化するものとなるのである。つまり、誘発されたものは、ただちに、誘発するものとなるのである。それらの二つの側面は、一方は誘発するものであり他方は誘発されるものであるという関係にある場合

識にとってほんとうのものであるのは、そのものである内なるもののうちにあるのが自分自身であるということ意識が確信しているからなのである。つまり、そのものである内なるものが、意識にとって、自分のちからで存在するという契機であるからである。けれども内なるものが意識にとってほんとうのものであることの、そうした理由が、意識には意識されていないのである。というのも、内なるものが内なるものであることによって、意識は自分のちからで存在するものとなっていないはずであるし、意識が自分のちからで存在するということが、否定的な運動にほかならないはずなのだが、その否定的な運動が意識として、いまだ消え去ってゆく現象という対象的なものであり【73】、意識自身が自分の力で存在するということではないからである。それだから、内なるものは意識にとつて概念ではあるのだけれども、意識は概念の本性がどのようなものであるかをまだ知らないのである。

こうして、内なるものがほんとうのものとなるのだが、そのほんとうのものは、絶対的に普遍的なものとして存在する。つまりそれは、普遍的なものと個別的なものとの対立によって汚されることがない普遍的なものである。悟性に対して生成したのは、そうした普遍的なものなのである。そしてここに初めて、感覚される世界をも現象する世界をも超えたところにある超感覚的な世界が開かれ、その超感覚的な世界が、ほんとうの世界となるのである。それは、何もかもが消え去ってゆく此岸の彼方にある、変わらず存在を続ける彼岸である。それはそのものであるが、理性の最初の、それゆえ不完全な現象であるようなそのものであり、あるいは、ほんとうのものが存在をもつことを可能とする純粋な元素でしかないようなそのものである。

というわけで、ここからさき我々の対象となるのは、物の内なるものと悟性との二つを極とし、現象を媒辞としておこなわれる推理である。そうした推理がくりひろげる運動が、悟性が媒辞とおしながら、内なるもののなかに何を見ることになるかを、そして、推理によってつながるといふ関係について悟性が何を経験することになるかを、さらに詳しく規定することになる。

内なるものは、意識にとつて、純粋な彼岸のままである。というのも、

意識は内なるもののうちにまだ自分自身を見いだしていないからである。内なるものは空っぽである。というのも、内なるものは、いかなる現象でもないものでしかないからであり、肯定的な言いかたをすれば、単純な普遍的なものでしかないからである。内なるもののこのようなありかたは、「物の内なるものは認識できない」と言うものたちにただちに同意するものではある。しかしその理由は、そうしたもののたちの考える理由とは、別なのである。【74】ここにあるような、何も介することなく内なるものとして存在する内なるものについては、確かに、何も知られることはない。けれどもその理由は、理性があまりに近視眼なものであるとか、あまりに制約されたものであるとか、あるいは、その他にどんな言いかたをしてもいいのだが、そうしたことはないのである（はたして理性がそうしたものであるかどうかについては、ここではまだ知られていない。というのも、我々はまだ、そうしたことが判断できるほど深くは考察をすすめていないからである）。それは、ものごとそのものの単純な本性によることなのである。つまり、空っぽであるもののうちには何も認識することができない、あるいは、言いかたを変えれば、内なるものが意識の彼岸にあるものという規定をもつものとしてある、ということがその理由なのである。――二つの場合を考えてみよう。

ひとつは、目の見えないものが、超感覚的な世界の富のうちに置かれた場合である。――そのさい、超感覚的な世界がもつ内容が、超感覚的な世界自身の内容であつてもいいし、あるいは、意識自身がその内容であつてもいい。――もうひとつは、目の見えるものが純粋な暗闇のうちに置かれた場合、あるいは、超感覚的な世界が純粋な光でしかないものであるとして、目の見えるものがそうした純粋な光のうちに置かれた場合である。どちらの場合も結果は同じである。目の見えないものが、目の前に超感覚的な世界のあふれんばかりの富が横たわっていても、そこに何も見ることがないように、目の見えるものも、純粋な暗闇のうちにあつても、純粋な光のうちにあつても、何も見ることはないのである。意識が、内なるものともかかわりをもたず、かといって、現象を介して内なるものと推論によってつながるということもおこなわないならば、残されるのは、以下のことをおこなうことだけである。つまり、現象にしがみつ

がその現実的なありかたを失うということなのである。力は、現実的なものとなるということがすすむうちに、現実的なものとは全く別のものとなつてゐるのである。つまり、普遍的なものとなつてゐるのである。

それは悟性が最初に、つまり、そのあと悟性が経験することになるようなことを何も介さずに、力の本質として認識していたものなのである。普遍的なものであることが、【71】力が実在的なものとして存在しているはずのときも、あるいは、力がもろもろの現実的な実体を支え維持しているはずのときも、力の本質であることが明かされたのである。

けれども、最初に存在していた普遍的なものと、ここであらわれた普遍的なものとは、同じものではない。我々が、最初の普遍的なものは悟性の概念であり、そこでは力がまだ自分のちからで存在するものになつていないと考えるならば、ここであらわれた第二の普遍的なものは、力の本質が、そのものとして自分のちからであらわれたものであることになつてゐる。あるいは逆に、我々が、最初の普遍的なものは、感覚されたものがそのまま意識にとつて現実的な対象であるとされたものであると考えるならば、第二の普遍的なものは、感覚される対象としてあつた力を否定するものという規定をもつものであることになる。それは、自分のほんとうの本質のうちにある力なのであり、悟性の対象としてのみ存在するものなのであり、感覚されることはない。第一の普遍的なものが、自分のうちに押し戻された力である、つまり、実体としてある力であるとするならば、第二の普遍的なものは、もろもろの物の内なるものである。それは、概念としてある概念と同じものとして存在する。

その内なるものこそは物のほんとうの本質であるのだが、その本質は以下のような規定をもつものとしてある。つまり、物の本質は意識に対して無媒介に存在するものではないのであり、内なるものへの意識の關係は媒介されたものとしてあり、意識は二つの力の戯れを媒介としながら、物の背後にあるほんとうのものへとまなざしを向けるのである。二つの力の戯れが、悟性と内なるものという二つの極をつなぐ媒介となるのである。力は、戯れる二つの力へと展開されたものとして存在しているわけだが、力がそのように存在することが、力が消えてなくなるといふことを意味するものであることは、今では悟性自身にも気づか

れている。消えてなくなる存在は、現象と呼ばれる。というのも、存在するといふことが、そのままただちに、存在しないといふことであるようなものを、我々は仮象と呼ぶからである。しかし、力の存在は、たんなる仮象なのではなくて、現象なのである。つまり仮象の全体である。

全体であるといふことは普遍的なものであるといふことであり、仮象の全体は普遍的なものである。そうした全体が、【72】内なるものをかたちづくるものとして存在するのである。二つの力の戯れはそうしたこととしてなされるのだが、そのときそれと並行して、意識は自分のうちへと折れ曲がり自分自身のうちへ還るのである。二つの力の戯れにおいては、対象的なしかたではあるが、知覚されているもろもろの本質が意識に対して、そのものとしてそれであるとおりのもので立てられるのである。つまり、静止することも存在することもなくただちに反対のものへと転化するもろもろの契機として立てられるのである。

ひとつであるものがただちに普遍的なものへと転化し、本質的なものがただちに非本質的なものへと転化し、その逆方向の転化もなされるのである。それだから、二つの力の戯れは、展開された否定的なものなのである。しかし、二つの力の戯れのほんとうのすがたは、肯定的なものである。つまり、普遍的なものであり、そのものとして存在する対象なのである。――そうした対象が意識に対して存在するのは、現象としてくりひろげられる運動に媒介されることによつてなのであり、その運動のさなかでは、知覚される存在も、感覚される対象としてあるものも、どれも、ただ消え去るだけのものという否定的な意味しかもない。それだから意識は現象を離れて、ほんとうのものとしてある自分へと折れ曲がり自分へと還るのである。けれども、意識はやはり意識であるから、ほんとうのものとしてある自分を、内なるものという対象的なものへと変えるのであり、そのようにして対象が自分へと折れ曲がり自分へ還るといふことを、意識自身が自分のうちへと折れ曲がり自分へ還るといふことは別のこととして区別するのである。同様に、意識と内なるものを媒介するものである運動も、意識にとつては、対象がくりひろげる運動として存在するのである。それだから、内なるものは、意識にとつて、意識に対立するひとつの極となるのである。けれども、内なるものが意

二つが区別されたものとしてあるのは、我々に対してのことであり、我々が二つを区別しているのである。しかし、形式の区別にしたがうならば、二つの極は互いに互いから自立したものとあり、互いと他と結びつきながらも、自分を他から分離し、自分を他に対立させるものとして存在するのである。二つの極は、【69】内容と形式というどちらの側面から見ても、そのものとして存在するものではない。が、二つの極の本質に区別をつくりだすとされているそれらの側面も、消失する契機ではないのであり、どちらの側面も反対の側面へとただちに移行するものとしてあるのであり、そしてそのことが、力がくりひろげる運動を知覚する意識に意識されることになる。しかし、さきに確かめたように、我々にとってはさらに以下のことも知られている。それは、そのものとして見れば、二つの極が内容と形式において区別されたものとして存在するということが消失しただけでなく、内容と形式とが区別されたものとして存在するということも消失したのであり、形式の側面から見たとき、能動的なもの、誘発するもの、自分のちからで存在であったものは、内容の側面から見たときに、自分のうちへと押し戻された力としてあらわれたものと同じものであり、形式の側面から見たとき、受動的なもの、刺激されるもの、他に対して存在するものであったものは、内容の側面から見たときに、多くの素材が共存する普遍的な媒体としてあらわれたものと同じものである、ということである。

以上のことから明らかであるのは、力の概念が二つの力へと二重化することによって現実的なものとなっていることであり、力の概念がそれをどのようにおこなっているかということである。二つの力は、自分のちからで存在する本質としてあらわれるのだが、二つの力が存在するということは、二つの力が互いに他に対して以下のような運動をおこなうものであるということなのである。つまり、力が存在すること、力が存在するということであることをやめて、純粹に他によって立てられたものとなるという運動であり、すなわち、力が存在するということが、力が存在するということであることをやめて、力が消失するということを純粹に意味するようになる運動である。二つの力は、互いに、固定されたものを自分のために取っておきながら、外面的な性質

のみを自分と他との中間に送り込み、他に接触させるような極として存在するものではない。二つの力が二つの力であるのは、二つの力のいずれもが自分と他との中間にあり、そこで他と接することにおいてのみなのである。力は、自分と他との中間において、自分のうちに押し戻されたものでありながら、つまり、自分のちからで存在しながら、ただちに、【70】外化することでもあるようなものとして存在するのであり、あるいは、誘発するものでありながら、ただちに、誘発されるものでもあるようなものとして存在するのである。それなので、それらの契機は、ただ先端を突きつけ合うだけの二つの極に分配されたものとしてあるのではない。それらの契機の本質は、あくまでも、おのおのは他とおしてのみ存在するものとしてあるということなのであり、おのおのが他とおしてしかるべきものとして存在するときも、そのことによって、ただちに、他とおしてしかるべきものとして存在することをやめるということにあるのである。それらの契機は実際に、固有の実体をもつものではないし、そうした実体を支え、それを維持することはない。力の概念は、現実的なものとして存在しているときも、本質としてある自分を保ち続けるのである。現実的なものとしてある力とは、外化した力であるわけだが、その外化が同時に、外化すること自身を廃棄することとしてなされる外化でしかないものである。現実的な力が、外化したものから自由になり、自分ひとりで存在するものとして表象されるならば、現実的な力は、自分のうちへと押し戻された力であることになる。けれども、自分のうちに押し戻されたものであるという規定をもつということは、実際には、既に明らかであるように、外化をかたちづくる契機のひとつにほかならないものである。それだから、力のほんとうのすがたは、力についての観念でしかないものそのままなのである。力の現実的なありかたをかたちづくるものもろの契機、力が支え維持するものもろの実体、力がくりひろげる運動は、区別のない統一へがらと崩れ落ちる。その統一は、自分のうちへ押し戻された力ではない（自分のうちに押し戻された力は、外化をかたちづくる契機のひとつではないものだからである）。その統一は、概念のまま存在している力の概念なのである。それだから、力が現実的なものとなるということは、力

だけのもののままであることをやめて、その代わりに、二つの完全に自立した力へと分裂し、そのことによって、統一によって支配されることから逃れているかのように見える。二つの力が自立したものとして存在するというのがどのようなことであるかが、さらに詳しく見られなければならない。ひとつの力が存在し、その力に対してもうひとつの力が登場するとき、その第二の力は、最初は、誘発するものとして登場する。そしてそれは例えば、普遍的な媒体であることを内容とするものとして登場する。そしてその第二の力が、誘発されるものという規定をもたされた第一の力に対立するわけである。けれども、その第二の力においては、二つの契機が入れ替わり、力さえも入れ替わるということが本質的なこととしてあるのである。つまり、普遍的な媒体であることがひとつのものであることへと入れ替わるのであり、そしてそのさい、誘発するものであることが誘発されるものであることへと入れ替わるのである。それだから、実際には、第二の力が、普遍的な媒体であることができるのは、それがそうしたものであることへと誘発されることによってなのである。同様に、その力が否定的な統一となることができるのは、つまり、力が自分のうちに還るということを誘発するものとなることができるのは、それがそのようなものであることへと誘発されることによってなのである。そのようにして、二つの力のあいだに存在していた区別、一方は誘発するものとしてあり他方は誘発されるものとしてあるという区別は、力の二つの規定されたありかたへとすがたを変え、それらがおこなうのは、互いに他と入れ替わるということとなるのである。普遍的な媒体であるということ、ひとつのものであるということが、力の二つの規定されたありかたであり、それらがおこなうのが、互いに他と入れ替わるということであるのと同じように、である。

ここにあるのは、二つの力の戯れである。それは、二つの力が互いに対立する規定をもち、そうした規定をもちながら互いに他にたいして存在しながらも、力のもつ規定が他の規定へとただちに絶対的に入れ替わり―移行するのであり、そうした移行によって生じたもろもろの規定のうちに二つの力があるとき、二つの力は自立したものとして登場しているかのように見える、ということである。例えば、誘発するものが、普

遍的な媒体として立てられ、それとは反対に、誘発されるものが、自分のうちに押し戻された力として立てられる。けれども、前者が普遍的な媒体であるのは、後者が、自分のうちに押し戻された力であることによってでしかないのである。【68】つまり、後者は前者に対して、誘発するものとして存在しているのであり、後者が前者を初めて、普遍的な媒体としてしているのである。前者が普遍的な媒体という規定をもつものであるのは、後者という他のものによってでしかないものであり、前者が誘発するものであるのも、誘発するものであることへと後者によって誘発された限りでのことではないのである。前者はただちに、普遍的な媒体としてあるという、自分に与えられた規定されたありかたを失う。というのも、その規定されたありかたは他のものへと移行する、というよりむしろ、既に他のものへと移行してしまっているからである。押し戻された力であることを誘発するよそよそしいものが、普遍的な媒体としてあらわれるのは、普遍的な媒体が、押し戻された力によって、押し戻された力であることを誘発するものであることへと誘発されることによってでしかないのである。つまり、押し戻された力が、普遍的な媒体を立てるものとしてあるのであり、むしろ、押し戻された力は本質的に、普遍的な媒体なのである。押し戻された力が、誘発するものを普遍的な媒体として立てるのは、普遍的な媒体という規定が、押し戻された力にとって本質的なものであるからなのであり、つまり、この規定がむしろ、押し戻された力そのものだからなのである。

この運動の概念がどのようなものであるかの理解を完全なものにするためには、さらに以下のことに注意を向けるのもいいかもしれない。つまり、区別されたもののものが、二重に区別されたものとしてあらわれる、ということである。区別されたものが、内容の区別であるものと形式の区別であるものとに区別されるのである。まず、一方の極が、自分のうちへ折れ曲がり自分のうちへ還った力であり、他方の極が、普遍的な媒体であるとき、それは内容の区別である。そして、一方の極が誘発するものであり、他方の極が誘発されるものであり、前者が能動的で、後者は受動的であるとき、それは形式の区別である。内容の区別にしたがえば、二つの極は、区別されたものとして存在するだけである。つまり、

では、その二つの側面が、力のもつ二つの契機となるのである。二つの契機は統一のうちにあり、それと同様に、その統一が自分の力で存在する二つの極に対して二つの中間にあるものとしてあらわれるのだが、この統一はたえずその二つの極へとたえず分解するものとしてあり、そのようにして分解した統一が二つの極なのである。―それなので、先には、互いと矛盾する概念が自分を否定することとしてあらわれた運動が、ここでは、対象においてくりひろげられる運動という形式をもち、力がくりひろげる運動となるのである。が、その運動の結果として、何にも制約されない普遍的なものは、対象として存在するのではないものとして、つまり、もろもろの物の内なるものとしてあらわれてくるのである。

話をもとにもどせば、力は、力そのものとして、つまり自分のうちに折れ曲がり自分のうちに還ったものとして表象されるとき、力の概念をかたちづくるひとつの側面であるのだった。その側面が、実体化した極となるのである。それも、ひとつのものという規定をもったものとして立てられた極となるのである。そのことによつて、もろもろの展開された素材の存在は、力からは排除され、力ではない他のものとなるのである。しかし、力そのものがもろもろの展開された素材の存在となるということは、つまり、力が自分を外化するということは、力にとって必然的なこととしてあるし、そのとき、力が自分を外化することは、力から排除されていた他のものが力へと歩み寄り、外化を誘発する、ということとして表象されることになる。しかし、力が必然的に自分を外化するとき、力は実際には、かつて自分ならざる他の本質として立てたものを、自分に属するものとしてしていることになるのである。そのため、力がひとつのものであるものとして立てられ、自分を外化するものとしてあるという力の本質が、外から力に歩み寄ってくる他なるものとして立てられた、ということだが、撤回されなければならないのである。力はむしろ、もろもろの素材としてあるもろもろの契機が存在することを可能とする普遍的な【66】媒体でさえあることになるのである。つまり力は、既

体として存在するものとなっている。しかし力は同じように本質的に、存在するもろもろの素材が廃棄されたものとしてあるための形式として存在するものでもある。つまり力は本質的に、ひとつのものとして存在するものなのである。が、力はもろもろの素材が共存する媒体として立てられているわけだから、ひとつのものであるのは、力ならざる他のものであることになり、力は、ひとつのものとしてあるという自分の本質を、自分の外にもつことになる。しかし、力が必然的にひとつのものと

して存在しないわけにゆかないものであるのに、力がまだそうしたものであるものとして立てられていないことによつて、力ならざる他のものとして存在するものが力に歩み寄り、力が自分のうちに折れ曲がり自分のうちに還るといふことを誘発する、つまり、力がおこなっていた外化を廃棄するのである。しかし実際には、自分のうちに折れ曲がり自分のうちに還るといふことをおこなっているのは、つまり、外化を廃棄することをおこなっているのは、力そのものなのである。ひとつのものであることは、力にとって他なるものであると思われていたのだが、ひとつのものであることは、そうしたものであることをやめている。力が自分のうちに押し戻された力となっているのである。

ただちに明らかのように、力ならざる他のものとしてあらわれ、力の外化を誘発するとともに、力が自分のうちへ還るといふことを誘発するものであるのも、力なのである。というのも、力ならざる他のものは、力がそうであるように、普遍的な媒体であつたり、ひとつのものであつたりするものとしてあらわれているからである。が、それらの形態のいづれも、力に対して、消失する契機としてあらわれているにすぎない。それだからそこにあるのは、力ならざる他のものが力に対して存在し、力が力ならざる他のものに対して存在するということなのであり、そしてそのため、力はまだその概念から抜け出てはいないものとしてある。力は統一のうちにあるひとつの力のままである。けれども、ここにあるのは、同時に存在する二つの力なのである。二つの力のそれぞれが概念としているものは同じである。しかし、その概念は、統一したままのものであることをやめて、二つにわかれて存在するものとなっているのである。対立し合う力は、【67】本質的に契機として消失し統一される

なわちここにあるのは、互いに自立したものとして立てられるというところが、ただちに、互いと統一したものとしてあるというへと移行し、互いと統一したものとしてあるということが、ただちに、互いに自立したのもろのもへと展開されたものとしてあるということへと移行し、そのように展開されたものとしてあるということが、再び、統一のうちへと還元されたものとしてあるということへと移行するのである。そのような運動が、力と呼ばれるものなのである。力の一方の契機であるのは、自立したもろの素材に広がりをもたせ存在させることだが、それが、力が外化することである。けれども力は、自立したもろの素材が消失することでもあり、それが、外に発現することをやめて自分のうちへと押し戻された力である。つまり本来の力である。けれども、第一に、自分のうちへと押し戻された力は、自分を外化しないわけにゆかないものとしてあり、第二に、そのように自分を外化しているときも力は、自分自身のうちに存在しているものでもあるのである。が、力は、そのように自分自身のうちにありながらも、自分を外化するものとして存在しているのである。―そのようにして我々が両方の契機を、区別を介さずに統一したままに保つとき、力の概念がそもそも悟性に所属するものでしかなくなり、力の概念が、互いから区別された二つの契機を、互いから区別されたもののまま担うものとなるのである。というのも、力そのものにおいては、それらの契機は区別されたものとしては存在しない、とされるからなのである。が、そのとき、それらの契機のあいだの区別は観念におけるものでしかなくなっているのである。―あるいはこう言ってもいい。上述したことにおいては、ようやく力の概念が立てられているだけで、力の概念は実在するものとして立てられていない、と。しかし力を実際には、何にも制約されない普遍的なものである。その普遍的なものは、他に対してしかじかのものでありながら、それ自身としてもそのしかじかのものであるようなものとして存在する。つまりそれは、他からの区別を―というのも区別は、【64】他に対して存在するということにほかならないからである―そなえたものなのである。それだから、力がそのほんとうのすがたで存在するためには、力が、力を対立のうちに固定している観念から完全に解放され、力の二つの区別

されたありかたを属性とする実体として立てられなければならないのである。つまり、まず、全体としてある力が、本質的に自分のちからでそれそのものとして存在するものとして立てられ、そのあと、力の二つの区別されたありかたのそれぞれが、実体的なものとして、つまり、自分のちからで存在を続ける契機として立てられなければならないのである。力が力そのものとしてあるとき、つまり、力が自分のうちに押し戻されたものとしてあるとき、力は自分のちからで、他を排除するひとつのものとして存在する。そしてそのひとつのものにとつて、もろもろの素材を展開することは、自分とは別の本質として存在するものとなる。そのようにして、互いから区別され互いから自立した二つの側面が立てられることになる。けれども、力とは二つの側面をひとつにした全体でもある。つまり力は、力の概念どおりのもののままなのである。すなわち、力の二つの区別されたありかたは、純粹な形式、消失する表面的な契機のままなのである。自分のうちに押し戻された本来の力としてあることと、自立したもろもろの素材を展開するものでもあるということと、自立したもろもろの区別されたありかたは、その二つがひとつのものとして存在するものでなくなるならば、それと同時に、存在することをやめるのである。あるいは、力の二つの区別されたありかたが互いと対立しながら存在するということがなかったならば、力も存在しないことになるのである。けれども、力の二つの区別されたありかたが互いと対立しながら存在するということは、二つの契機が同時に互いから自立したものとしてある、ということにほかならないのである。―それだから、これからここで考察されなければならないのは、二つの契機が絶えず自分を自立したものとしながら、その自分を再び廃棄するという運動なのである。―一般的に明らかなこととしてあるのは、そうした運動が、知覚することがくりひろげた運動にほかならない、ということである。そこでは、知覚をおこなうものと知覚されるものという二つの側面が、【65】一方では、ほんとうのものを受け取るということをおこなうものものとして、ひとつの区別不可能なことであり、同時に、他方では、どちらの側面も、自分のうちに折れ曲がり自分のうちへ還ったものとしてあり、自分のちからで存在するものとしてあるのである。ここ

ものとしては、肯定的な意味をもつものでもある。つまり、自分のちからで存在するということと他に対して存在するということの統一が立てられている、つまり、互いと絶対的に対立するものがそうしたもののまま同等の本質として立てられている、という肯定的な意味をもつものでもある。結果は最初は、それらの契機の相互の形式に坎することではないかのように見える。けれども、自分のちからで存在すること、他に対して存在すること、同じように、内容そのものなのである。なぜならば、自分の力で存在することと他に対して存在するということの対立は、ほんとうは、結果において明らかになつたことと別のことを本性するものではないからである。つまり、知覚することにおいては、対立がほんとうのものと見なされたが、それは実際には、形式に属するものでなく、統一のうちへと解消されているものでなく、そしてそのようにしてそれは内容となつていくからである。そうしたものとしてある内容は、同時に、普遍的なものである。

自分がそなえる特殊な性質によつて、何にも制約されずに普遍的なものとしてあることのうちへ還るということ逃れるような、その他の内容は不可能なのである。もしそうした内容が存在するとしたならば、それは、自分のちからで存在しながら他に対して関係するということを、規定されたしかたでおこなうものであることになる。けれども、自分のちからで存在しながら他に対して関係するということは、規定されたしかたでおこなわれるものではない。それは、内容の本性と本質をかたちづくることなのであり、そして、何にも制約されない普遍的なものであることが、内容の本性と本質のほんとうのすがたなのである。結果は端的に普遍的なものとして存在するものである。

【62】しかし、その何にも制約されない普遍的なものは、意識の対象としてあるのだから、対象には、形式と内容との区別が生じることになる。内容の形態としてあるとき、普遍的なものをかたちづくる契機は、以下のような外見をとることになる。つまり、一方では、多数の特殊な素材が共存する普遍的な媒体としてあらわれ、他方では、自分のうちに折れ曲がり自分のうちへ還つたひとつのものとしてみえられ、そこでは、多数の特殊な素材は消去されているのである。形式としては、前者は、

物が自立したものとして存在するということの解消である。つまり、他に対して受動的なものとしてみえ存在することである。後者は、自分のちからで存在するということである。これらの契機が、それらの契機の本質である、何にも制約されない普遍的なもののうちで、どのようにあらわれるかが、見られなくてはならない。さしあたり明らかこととしてあるのは、それらの契機は、普遍的なもののうちにのみ存在するものであるから、もはや互いと離れ離れになることはない、ということであり、それらの契機において本質的であるのは、それらが自分を廃棄する側面として存在するということだ、ということであり、なされるのは、互いに他へと移行するということだけだ、ということである。

そのようなわけだから、一方の契機は、片方によつた本質としてあらわれる。つまり、もろもろの自立した素材が共存する媒体として、つまり、もろもろの自立した素材ひとつが存在することとしてあらわれる。それらの素材が自立したものとして存在しているということが、媒体にほかならないのである。つまり、媒体が普遍的なものとしてみえ存在することは、もろもろの素材が多数の様々な普遍的なものとしてみえ存在することなのである。普遍的なものは、それ自身が多くのものとして存在するものであるということと分ちがたく統一したものである。そしてそのことが意味するのが、多数の普遍的なものとして存在するもろもろの素材のどれもが、他の素材が存在するところに存在するものである、ということなのである。それらの素材は互いに他と浸透しながら存在しているのである。しかしそのとき、互いに他を刺激することはない。なぜならば、それらの互いと区別された多数の素材は、それとは反対に、互いから自立したものとして存在しているからである。そしてそのことによつて、それらの素材は同時に、純粹に他と浸透し合つたものである【63】ことになるのである。つまり、廃棄されたものであることになるのである。もろもろの素材がそのようにして廃棄されるということが、つまり、様々な素材が存在するということが純粹に自分のちからで存在することへと還元されるということが、媒体そのものにほかならないのである。が、その媒体は、互いと区別されたもろもろの素材が互いに自立したものとして存在することなのである。す

【59】

目 力と悟性
現象と超感覚的な世界

感覚的な確信がくりひろげた弁証法において、意識にとって、聞くことや見ることは過去のものとなった。そのあと意識は知覚をおこなうものとして、もろもろの観念へと至ったのだった。そのもろもろの観念を意味は、何にも制約されない普遍的なものの中で初めてひとつにまとめるのである。そうした何にも制約されないものが、静止した単純な本質として受け取られているならば、制約されないものそれ自身が再び、自分のちからで存在することの一方の極でしかないことになる。というのも、制約されないものが単純な本質として存在するとき、制約されないものには、本質ならざるものが対立することになるからである。が、そうした本質ならざるものと結びついたものであるならば、制約されないもの自身が非本質的なものであることになり、意識は知覚することがおちいついていた錯覚を抜け出していないことになるだろう。けれども、意識は自分が、自分のちからで存在するということがそうした制約されたものでしかないことから抜け出して、自分のうちに還っているものとしてあることを示したのだった。——これからは、そうした何にも制約されない普遍的なものが意識にとつてのほんとうの対象となるのだが、けれどもそれはまだ、意識の対象として存在したままなのである。意識は自分の概念を、まだ概念としては把握していないのである。対象が自分のうちに還ったものとなっているということ、意識が自分をまだ概念として把握していないということとは、本質的に区別されなければならないことである。意識にとつて対象は、他のものとの関係のうちにあることをやめて自分のうちに還ったものとして存在しており【60】、そのことによって、そのものとして概念であるものに生成している。けれども意識のほうはまだ、自分のちからで概念であるのではなく、そのため意識は、自分のうちに折れ曲がり自分のうちに還ったものとして存在する対象のうちに、自分を認識することはない。我々から見ると、そのような対象が生成したのは、意識がおこなった運動とおしてなのである。つまり意識は、そのような対象の生成に組み込まれたものとして存

在しているのであり、対象が自分のうちに折れ曲がり自分のうちに還るということ、意識が自分のうちに折れ曲がり自分のうちに還るということとは、同じできごとなのであり、ひとつのできごとでしかないのである。けれども、そうした運動のさなかにありながら意識が自分の内容としているのは、対象として存在する本質であり、意識自身ではないのである。意識にとつて、運動の結果は、対象において生じたことという意味をもつべきものである。意識はまだ、生成したもののうちから、自分のうちへと退いてはいないのであり、生成したものが意識にとつて本質であるとしても、そうであるのは、生成したものが対象的なものである限りでのことなのである。

そのようにして悟性は、確かに、自分自身のほんとうならざるすがたも、対象のほんとうならざるありかたも廃棄してはいる。そのことによつて意識に生成しているのは、ほんとうのものの概念である。が、そのほんとうのものは、そのものとして存在するほんとうのもののなのであり、まだ概念ではないのである。つまり、意識が自分のちからで存在するということ、そこに欠けているのであり、悟性はそれが自分のうちに存在するものであることを知らないまま、それを放置するのである。それは、自分のちからで自分の本質であることを実行するのであり、それがそのように自由に自分を実現することに意識が参加することはないのであり、意識はそれがそのように自由に自分を実現するようすをただ眺めるだけであり、そのようすを純粹に受け取るだけなのである。それなので我々が差し当たりおこなわなければならないのは、我々がその代わりをつとめ、我々が概念となるということなのである。その概念がおこなうのは、結果のうちに含まれるものを育てるということなのである。結果のうちに含まれるものがひとつの対象へと育ち、それが意識【61】にひとつの存在するものとしてあらわれるとき、意識は初めて、概念的に把握する意識となり、それを概念的に把握するのである。

結果としてあるのは、何にも制約されない普遍的なものだった。が、それが何にも制約されない普遍的なものであるのは、最初は、意識が意識のもつ一面的な概念を否定し、それを捨象した、つまり放棄した、という否定的で抽象的な意味においてなのである。けれども結果は、その

翻
訳

A Trial to Translate Volubly Hegel's "Phaenomenologie des
Geistes" 5

HARASAKI Michihiko

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

I translate page 59-100 of the original text.

ヘーゲル『精神現象学』饒舌訳の試み
5

原
崎
道
彦
（高知大学教育学部）